

北欧＝最近障害者事情 第6回 デンマークの障害児学校

全国障害者問題研究会事務局長
日本障害者協議会理事

園部 英夫

「思い悩み、死を考えたことも幾度となくありました」「自分が地の底に埋もれていくようでした」。川瀬とし江さんは滋賀から参加した。井上靖の小説「星と祭」が描いた十一面観音のある湖北の人だ。

長男と長女、2人の子どもたちは重症心身障害児。ある日、子どもらのあどけない笑顔にひとすじの光を見た。目があうと笑顔が返せ、気持ちが一步前に踏み出せた。そこから仲間やスタッフとの出会いに元気をもらったと言う。川瀬夫妻が核となって、地域で人の輪を広げ、保育園への障害児受入、地元養護学校入学、卒業後の作業所づくり、県下初の重症心身障害者通園事業など、何もないところから運動して制度をつくってきた。(『あしたにいわば 一重症心身障害児二人の子育て』(文理閣)、ぜひ一読を！)

そんなパイオニアの大先輩が、デンマークで訪問した障害児学校で、一人一人のからだに配慮され、そのときどきの用途にあった多様な車イスに大きなショックを受けた。

「寝たきりの重度の子ども、車イスによって勉強できる！ 食べられる！！ たくさんの車イスによって、こんなに変わるものと驚きました！！！！ 日本だと、ただ車イスにベルトが着いているだけですね」。

■選択される障害児学校

コペンハーゲンの北18キロにある「ギールスゲート・スコーレン」は、生徒数約100人。6歳から9歳の低学年、9歳から14歳の中学年、15歳から18歳の高学年にわかれ、学習に遅れのある脳性マヒ児、重複障害児、視覚・聴覚障害児の3コースを加え、学童保育所、寄宿舎(現在7名が利用)、ショートステイ施設を併設している。

朝9時をすぎたころ、私たちは3、4人の4グループにわかれて、それぞれの授業を参観した。1月の朝、ようやく陽が昇り、大きな厚い窓ガラスを通して、穏やかな光があふれていた。

私が訪ねたは高学年クラス。サッカーのベッカム

似のおしゃれなサイモンは前生徒会長。現生徒会長はやや地味な感のあるトビアス。シルビアとキャスパーはマヒがけっこうきつそう。パソコンにはそれぞれの名前。好みの壁紙があり、インターネットを使って、近々見学に行く国会について勉強していた。

このクラスは、今日休んでいる2人を加えて6人の生徒に、教員が2人、資格のある支援員(ペタゴ)が2人いるという。

10時になると水分補給(おやつ?)の時間。ややマヒはあるもののパソコンさばきはじつに巧みで、休憩時間には重度の子の車イスを押しながら廊下を移動するサイモンくんについて、先生に少し聞いてみた。

「どうしてサイモンくんのような障害の軽度の子どもが、この学校にいるんですか？ 地域の学校で学びたいという希望はなかったのですか？」

「彼には発作やマヒがあり、病気のために、この学校を自分で希望したのです」と先生は言った。

■インテグレーションから障害児学校の再評価へ

現地で青年教育に携わるデンマーク社会研究協会の片岡豊さんは、デンマークは1980年代に「インテグレーション」をくぐって、「養護学校の見直し」がされ、養護学校に通う障害児の数は、1985年から20年の間に、2倍以上も増加しました」と言う。

そして、「単純に地域での教育や統合教育をよしとするのではなく、より専門的な知識に基づき、障害児の個別的な教育ニーズにあった特殊教育を行う



教室には一人一人にパソコンが充実

べきだという声が高まってきました。

その結果、障害の種類と度合いに応じて、多様な特殊教育が設置されるようになりました」と報告している(デンマークの障害児教育とインクルージョン、「リハビリテーション」2004年)。



93年以降、私が訪ねた3つの学校でも、障害児の教育は、「場の統合」を重視しながら、それぞれの特別なニーズと障害や発達をていねいに検討され教育実践されていた。インテグレーション(統合教育)は止揚され、多様な教育の保障がとりくまれていると感じた。

▼1993年=ヘルシンオア市の小学校(300人)

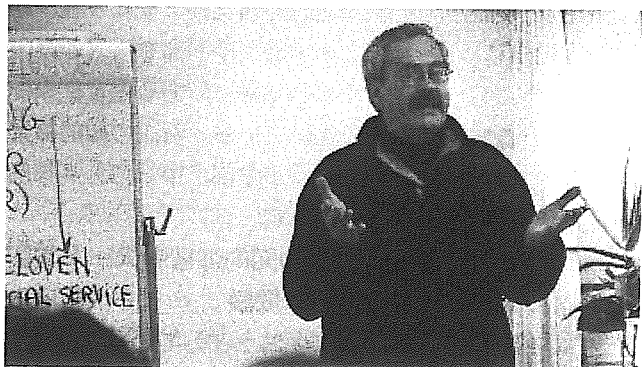
障害児は29人。特別クラスには、担当教員に加えて、OT、PT、STが配置されている。教育は市の責任だが、障害児には県から予算措置がある。音楽の授業などは子どもの発達の状態をみて普通学級でインテグレートしている。共通の行事などでするだけ統合化を努力している。

▼2001年=オーフス市の小・中学校(435人)

障害児は26人で4クラス。教員6人は特別クラス専門。教育は市が管理。特別な教育を行うこの4クラスだけは県が管理。副校長は障害児クラスを統括。毎週木曜日は学校のパーティがあり、自由に交流している。

▼2004年=アレロズ市の小・中学校(500人)

障害児学級(24人の小規模な養護学校?)。副校長



熱っぽく実践を語るハル校長

が学級の責任者)があり「場の統合」がされている。学習障害児へのとりくみとメディア教育に力を入れているという校長は「どんなに障害があっても、人としての発達の可能性がある」。

■ハル校長の確信

いろんな要素をつうじて「生きるよろこび」を子どもたちに感じて欲しい。教育実践はとても大事だと熱っぽくレクチャーしてくれたハル校長に次の質問をした。

「国連ではインクルージョンが強調されるが、インテグレーションをくぐったデンマークは、今後どのような展開を考えているのですか?」

○サラムンカ声明(94年、インクルーシブ教育の声明)は国会でも大きな議論をよんだ。できる限り通常の学級への統合がよいとも言われた。

○でも私は、この議論のとき、「では、この学校は閉鎖したらいいよ!」と意図的に言った。

○たしかに、障害児の通常学級への統合は、1、2年生なら可能かもしれない。しかし、通常クラスに障害児が入ることで、そうでない子のメリットは減少すると多くの人は考えている。

○障害児の学習、行動面では普通の子より時間もかかる。最初はみんな待ってくれるかもしれないが、そのうち待つのが嫌になり、障害児はクラスの片隅においやられてしまうことが多い。

○障害児にとって孤立・孤独感は大きなデメリットになる。

○この学校では子どもたちにとって同じような環境、ペース、同じようなことを共有できる。自分に対する安定性(自己肯定感)が増してくる。それはハッキリしていることだ。

ハル校長の学校への絶大な自信を感じた。

(最終回につづく)

参考資料 <http://www.nginet.or.jp/~kinbe/>